

科目	どのような基準で学業成績の結果を出されましたか。提出された成績評価も踏まえてご記入ください。
F	授業への参加度や提出課題20%、TOEICの得点20%、e-learningとワークシート20%、試験40%の配点で、総合的に評価した。
F	定期試験60%、学期の途中で2度行った単語テスト20%、7月のTOEICの結果10%、授業参加度10%で評価しました。定期試験の前に行われるTOEICでは、350点の壁が一つの障壁になった学生もいましたが、期限内に課題をこなし上でテキストに関する授業での定期試験、そしてTOEICの再テストと、学習する機会は十分にあったと思います。
F	英語Ⅰ、英語コミュニケーションⅡのどちらも、ルーブリックを作成し、評価規準についてどのようにしたら基準ABCがつき点数化されるのかオリエンテーション時に配布し説明して授業を行った。定期試験、最終発表以外に毎時間でも評価され多方面から成績結果がでるよう示した。
F	出席回数、小テストの結果、英文エッセイの評価、学期末試験のスコア、受講生の英語の発音、授業への貢献度などを考慮しつつ総合的に判断いたしました。
F	授業中の課題への取り組み姿勢、提出物、定期試験と、大学側の決定事項であるTOEIC試験での350点以上取得という条件で評価しました。
F	英語Ⅰの授業の規制に基づき、TOEIC試験で350点以上の学生はクラス評価と期末レポートを含めて採点した。TOEIC試験で350点以下の学生は、TOEIC補習試験で合格の学生は授業及び期末レポートの評価がいずれもS、A、B、Cの場合、英語Ⅰの授業規制に従い評価はCとなった。TOEIC補習試験で不合格の学生は、英語Ⅰの授業規制に従い評価はDとなった。
F	平常点25%、予習点25%、自主学習点25%、期末試験25%の割合で、4つの観点から総合的に評価した。このうち予習点とは、毎回予習をすることによって学生が得られる点数で、その有無については、授業開始時の各学生のテキスト・ノートチェック、及び授業時間中の応答の仕方によって確認した。自主学習点は、e-learningの課題達成度に応じて得られる点数である。提出した成績評価については、上記の基準を満たす学生が多かったため、S・A・Bが大半であった。但し当科目では、教員の基準とは別に、本学が定める基準(TOEICスコア350点以上、あるいは補習テスト合格)にも従う必要があったため、それが原因でCやDの評価を出さざるを得ないケースもあった。
F	授業の最後に、その回の授業で行った内容に関する課題を提出してもらいそれを採点したものと、小テスト、定期試験で評価した。
F	毎回の小テスト50%、学期最後に行うプレゼンテーション(独創性・発音・内容)20%、平常点(毎回ペア・グループで課題)30%を総合的に評価した。
F	特になし
F	定期試験の評点による。初級語学の試験では主観的判断の入る余地はないので、点数は明快である。
F	提出された課題30点と期末テストの点が70点。計100点満点。平均点を出し、平均点の半分に満たない者を不可とした。後は点数に従ってS+A10名、Bが25名、Cを10名ほどとした。
F	宿題と小テスト40%、定期試験50%、授業参加度10%による。
F	シラバスに書いた方法で成績を評価し、提出しました。つまり成績の評価は平常点数40%(学習態度、平時練習、宿題と小テスト)と期末テスト点数60%を合せて総合的に行う。
F	1.小テストの成績+期末テストの成績 2.普段の授業参加の積極性 3.出席率

F	小テスト(毎回授業開始時に行う前回の復習テスト)40%と、期末テスト60%の合算で行う。
F	小テスト、会話のテストやグループごとの発表をもとに成績を出した。出席率が悪かったり、授業態度が悪い場合は、評価を下げますが、そのような学生はほとんどいなかった。
F	期末試験の結果が主だが、それに加えて授業中に書かせた課題、テキストの問題の提出なども加味して結果を出した。
F	この授業はスピーキングテストが大事です。来年も同じテストをします。
F	3回の筆記試験の合計点と出席状況。
F	専攻別によるクラス編成のため、英語力差が大きいクラスでは、評価項目と割合は同じでも、到達度の基準を調整しています。
F	1. 定期試験30%            2. 出席、授業参加度25%            3. 発表30%            4. 課題15%
F	全体評価と相対評価を組み合わせ、結果的には5%程度がS、15%程度がA、45%程度がB、35%程度がCとなるようにした。またこの基準にもかかわらず、極端に成績が低い場合(例えば正答率が20%程度の場合)はやむなくDをつけるようにした。
F	複数の実技テストで、より多くのコミュニケーションをはかったか、また相手の理解を促すための努力工夫をしたかを確認し、その上でペーパーテストにより、多くのことを英語で伝えようとしたかを重視した。その結果、平均以上の評価が出た。
F	平常点25%、予習点25%、期末試験50%の割合で、3つの観点から総合的に評価した。このうち予習点とは、毎回予習をすることによって学生が得られる点数で、その有無については、授業開始時の各学生のテキスト・ノートチェック、及び授業時間中の応答の仕方によって確認した。提出した成績評価は、上記の基準を十分に満たす学生が大半であったため、S・Aが多く、B・Cが若干名であった。